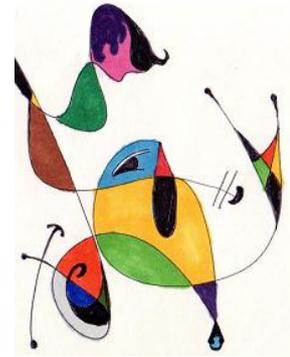


■ 振り返りの記 ■

あの当時(1974年)の【タヴィストック】のMrs. マーサ・ハリスの《乳幼児観察セミナー》に遡り、その記憶を辿ると実に懐かしい。私の観察事例ペピの発表はいつも沸きに沸いた。初回などは、セミナー・メンバーの皆さん方にお配りした資料を私が読み終えると、一斉に熱烈な拍手が湧き起こったから驚いた。Mrs. マーサ・ハリスが殊の外お喜びであった。これは実にラッキーなことであった。観察資料を今読み返すと、何ともナイーブな私がいるので恥ずかしいほどなのだが・・・。



そうした私を皆さん方が敢えて肯定的にとらえてくださって、つまりは観察において取り分けて自分の主観性を重んじ、そして観察対象に深く寄り添う、感情移入(empathy)の能力が注目されたようだ。此の点においてセミナーでは私はユニーク(特異)と見做された。ユニークな母親、ユニークな子ども、そしてユニークな観察者の私というわけであった。だが当時27歳の私というのは確かにいくらユニークであったにしても、明らかに未熟であったことは否めない。やがてその後 専門職に身を置く中で否も応もなしに自己規律 self-discipline が不可欠とされた。言い換えれば専門職として(対象との)距離感(Professional Detachment)を身に付けざるを得ないことになってゆく。そうすると、単純にナイーブというわけにはゆかなくなる。それで良かったとも言えるだろうが、些か面白味が薄らいでいったように思われて、むしろかつての粗削りながらも無邪気な自分が懐かしく、何を得たのやら何を失ったのやらと、当時を振り返ると可笑的いやら、また一抹の寂しさをも禁じ得ない。

さて、ペピの母親のMrs. Pが同国人から見たら、どう見えるのか私には定かではない。彼女がユニークだと彼女自身の言葉であったが、それも何気なしにそれを私に語っただけ・・・。確かに後にも先にもイギリス人の口から自らについてそのように語られるのを聞いた覚えはない。おそらく彼女には‘型破り’な何かがあるのだろう。それも必ずしも皆誰もがいいとは言わないかも知れない。だが、Mrs. マーサ・ハリスは違った。気脈を通じるというか、個人的にも痛く共鳴するものがあつたように見受けられる。或る意味で彼女らは‘似た者同士’だったのかも知れない。彼女もMrs. Pもどちらもが母親であり、そして教育者でもあつたわけで・・・。そう言えば、Mrs. マーサ・ハリスがかつて産まれたばかりの我が娘をベビー用のキャリコットの中に入れて、【タヴィストック】のセミナーに通っていたと聞いた覚えがある。育児とキャリア達成と、どちらもフル回転である。そこらも彼女らの似たところであつたといえよう。それに私から見ての話だが、何よりも彼女らが似ていると思われ、その共通項として真っ先に挙げられるのが、‘母性的な抱擁力’ 即ち ‘maternal containment’ ということだ。Mrs. Pは実に抱擁力のある方だったし、また当時の【タヴィストック】の中で抱擁力を感じさせる人ということであれば、Mrs. マーサ・ハリスを措いてほかに誰も思い浮かばないほどなのだ。どちらもが実に廉直で稀有な人たちであつた。今こうして振り返ると、ペピの観察の発表は、私が彼の地ロンドンの【タヴィストック】で受け入れられ、私のサイコセラピストとしての資質を評価してもらった端緒となつたものだが、それも偏にMrs. マーサ・ハリスのお人柄に依るものと考えれば感無量であり、さらには、そこに私の与り知らぬ彼女のMrs. Pとの間の

‘個人的共鳴 personal resonance’が背景にあったということならば尚更に感慨深い。事実、あの時のセミナー・チューター(tutor)がMrs. マーサ・ハリスではなく、別の誰かであったのならば、その後の彼の地での私の運命はさほど拓かれてゆくことはなかったであろう。

私がペピの観察を始めたのは1974年1月31日であり、Mrs. マーサ・ハリスからSt. George's Hospital のTrainee Child-Psychotherapist のポストへの応募のお話しが私にあったのは1974年5月10日である。この間に彼女のセミナーで観察事例ペピの発表を私は幾度かしている。当時私は無職で、ひたすら保育やら療育の施設でオブザーバーとして子どもたちの観察に携わっていた。とにかくこの抜擢は信じられないほどの僥倖といえた。やがて採用が決定され、私は1974年9月13日に初出勤を迎える。彼の地での本格的な心理臨床への道程はここから始まった。もはや引き返せない事態となった。パーソナル・アナリシスも10月には開始されることになっていたわけだから…。詰まるところ、Mrs. マーサ・ハリスから、St. George's Hospital の児童精神科外来のSenior PsychoethrapistであったMr. ジョン・ブレンナー(John Bremner)の指導の手に私は託されたということになる。彼らはかつて【タヴィストック】での同期生であり、昵懇の間柄なのだ。こうしたご縁の連なりを俯瞰するとき、まずそのきっかけが紛れもなしにMrs. P (&ペピ)であったわけで、まったくのところすべてが‘偶運’という外ない。

この歳月、私はMrs. P (&ペピ)を忘れていたと思っていた。ところが、此の度40年昔に遡る観察資料を読み返しながらか、改めて思った。決して忘れてはいなかったということも…。むしろ彼らは私の‘一部’になっていたということなのだ。あの当時見聞きした事柄、そしてそのままの感触、感慨、感激やら慄き、疼きやらが…。そしてよくよく胸のうちを覗くと、或るものが見えてきた。帰国後これまで私が生きてきた中で、折々に自分がどうしてこういう自分なのかと訝しく思うことがなくはなかったわけだが。事実何らかの岐路に立たされているようなときに、何かしらがグイッと内側から私を突き上げ、‘プッシュ push’するのであった。それで怖れを知らないというか、いつしかくそうなるべくして、そうなった>みたいところで事が収まる。<私らしいのか、私らしくないのか>、そのいずれにしても…。それは概ねプロフェッショナルというよりパーソナル personal な次元での事象であったともいえるが…。そして今なら解る。その正体が、誰でもない、Mrs. Pだということも…。つまりのところ、それらが真実彼女という人の‘刷り込み imprinting’に起因していると思えば、まさに腑に落ちるといった感覚である。意識的に彼女を拗りどころにしていたということではなかったし、殊更に己れの指針 principle を彼女に仰いだというつもりでもないのだが、時々ふと彼女Mrs. Pが心の内に聞えるのだった。それを聞いてるつもりもなしにだが…。この歳月、抜き差しならぬところで、彼女から大きく影響され、彼女から引き継いだいのちを私は生きていたと言えなくもない。

かくして、乳幼児観察はそれ程に私の‘血肉と化した’経験といえるわけだが、<経験から学ぶ>ということが誰かのいのちを引き継ぐことだとしたら、私がMrs. Pといういのちから何を学んだのか、それはどのようないのちであったのか、幾つかそのエッセンスを具体例でまとめて語りたい。おそらくは、それらが

心理臨床家のスタンスとして肝要なる何某かといった意味を読者にもたらしめたい。

まず彼女について語ろうとすると、真っ先に浮かぶのが【抱擁力 containment】ということだが。それは即ち、心の中で誰をもく除け者にしない・迷子にしない>ということなのである。心のスペース (mental space) に誰をも彼をもしっかり抱えている、そうしたcontainingの能力である。彼女は人との関係において絶えずリンクを張っている。そして人と人とをリンクづけることにも実に巧みであった。ペピとの会話の中にも、折々に(不在の)父親を登場させるといったことだが…。他にも、ペピも知っている誰かさんなら必ずその名前に言及し、彼に語ってあげるのだ。

それから、【痛苦への感受性】というものがあるが、これは<一緒に悩んであげる>ということだ。ペピが予防接種を受けた後、体調が思わしくなく、むずかっていた。Mrs. Pは、彼を両腕に抱えながら、<ほんと可哀想に。ママはどうしてあげたらいいのかわからないわ。だけど、少しでもよくなるように一所懸命にやるわね(Oh, poor darling! Oh, I don't know what I could do for you. But I will try my best to make you feel better)>と憂い顔でやさしく声を掛けていた。痛苦に寄り添い、情緒的に、そして言語的にも身体的にも手堅く反応する。まさしく子どもの抱える心身の動揺(ショック)に対しての【緩衝力】ともいえようが、感銘深いものがあった。事実として、赤子でなくとも、<誰かが痛みを感じてくれている。だから自分も痛みを耐えられる>、そのように心が宥められるということがあろう。

また、上記のことに付随するが、【自分を与えることを惜しまないということ】(availability)といった能力である。これには格別に優れたものがあった。例えば、Mrs. PとチャイルドマインダーのMrs. Nとの違いでいうと、ペピが哺乳瓶を自分で飲めるようになったと言って、Mrs. Nが喜んで報告したことがあった。だが、これに対してMrs. Pは喜ばなかった。むしろ彼を抱っこして、哺乳瓶に手を添えて彼に授乳してやって欲しいと思ったのだ。Mrs. Nはチャイルドマインダーという立場からして、ペピを預かって日々を無難に無事に過ぎてゆくことを願っていたのは当然だし、彼が‘自立’してゆく(自分で何でも出来るようになる)ことがむしろ望ましいし、それを誇りにも思う。また自分のお手柄にもなる。だが、どうやら彼女は己れ自身を与えることで、ペピの‘一部’になるということ、その悦楽をさほど知らなそうである。実際のところ、子どもが育つにつれて、いずれは手出しが出来なくなるというのが母親の宿命で、今こうして思う存分に我が子に自分を与えるとしたら、それはむしろ恵み privilege なのだ。義務やら責任ということではなくて…。ここに、一つ彼女の言葉で印象に残っていることを思い出す。<I can't make him love me (私のことをペピに愛させようとしたって、無理な話ね)>ということ。愛するという感情は決して無理強いされることは出来やしない。自ずから湧き出し、芽生えるのだ。だから、惜しみなく愛を与えながら、報われることを殊更に求めない。唯母親として子どもに自分を与えることが嬉しいということに尽きる。例えば抱っこ。それも今しかないとしたら、尚更ではないか。大いに抱っこさせてもらうことを喜べるという。とにかく‘手’を惜しまないことが肝要だ。それがMrs. Pの真情であり、信条でもあったろう。即ちこれは、Mrs. マーサ・ハリスのいうところの【the experience of togetherness(一緒であること)】であり、それを彼女は何よりも重視していたことになろう。

それから、Mrs. Pという人は<誰もがユニークだ>という【フェアな達観】の持ち主であった。皆誰しも‘その人自身の心’を持っている、即ち<He's got a mind of his own>といった固有性への理解である。彼女が政治的な主義(イデオロギー)を声高に主張することはなくても、アフリカでの見聞からして反アパルトヘイトであるのは間違いなく、彼女の人生は総じて、まずはガーナ人のMr. Pとの結婚にしてもそうだが、‘バリアー崩し’として総括されるのではなからうか。彼女自身が、それを体現していると覗かれた。敢えて言うならば、ペピはそうした彼女の‘申し子’としてある。こうした母子の絆、それを生きることはペピにとって気楽であるはずはない。当然ながらemotional turmoil(情緒的混乱)を来たすことは否めまい。だが、どっちに転んでも、<おまえはユニークなのだ>と言われることはなんとという励ましだろう。ペピがそうした母親の期待を担えることを、私は内心強く願っている。

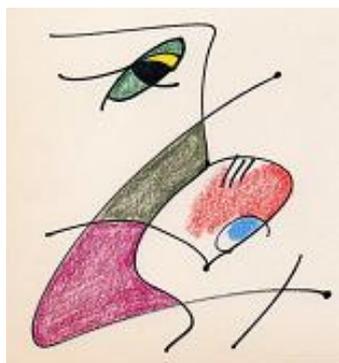
最後に、彼女という人の個性が最も輝いていると思われる一つに【面白い能力】を挙げたい。何でも面白い癖のある人であった。これはあらゆる事象・物事に秘められる‘enchantment(喜悦)’を探すということである。例えば、<ペピが悪さすると叱らなきゃいけないのだけど、ついヘエーツ、そうか、こんなことも面白くてするのだから感心してしまい、ついウスツと笑ってしまいそうで困るの..>と、笑いながら彼女が私に語ったことがある。制止の<No! (ダメです!)>は聞いたことがない。彼が1歳になり、電気プラグに触ろうとしたときまでは..。ペピの探索行動が日増しに多彩になってゆく頃だが、触る、口に入れる、手当たり次第に..。おもちゃ類もそうだが、むしろ家中のどれもが、キッチンの鍋類やらゴミバケツやらがペピには面白くてたまらない。新聞紙やら雑誌など紙類が特にお気に入り、手で破きまくるやら口に入れてしゃぶるやら..。彼女は積極的に惜しみなくそれらをペピに与えていた。彼女という人はいちいち目くじらを立てるやらムキになるということが皆無であった。ペピの‘悪ふざけ’が目立ってきた折も、どちらかというとき軽くふんわりと受け止め、そして軽く返す。もしくはうまく気を逸らすのがうまい。決してまともにガッチンコしない。<No!>と言って制止すればお終いなのだが..。生活の規範やら秩序が大事というよりも、むしろ<経験すること・させること>がまず大事といわんばかりである。そこに《成熟した魂》が証しされているように私には思われた。元夫に連れられて異国での生活を経験したこともあったからであろう、何かしら周りの何もかもが「full of wonders」であり enchantingなのである。つまりは‘不思議’というものに魅了されている人なのだろう。未知が既知になること、その不思議さがたまらないということでもある。面倒だ、厄介だと撥ね付けたら、物事はそこで終わるわけで..。いかような出会いに対しても心が常に開かれてある。私をペピの観察者として心よく迎えてくださったこともその一つである。そこには英国人特有の寛大さ(generosity)というだけではないものがあった。とにかく私と喜んでご一緒してくださったということが実に得難く思われる。大きな Good Luck(幸運)であった。しかしながら、彼女は肩の力を抜いて、お気楽に構えてはいるものの、根っからの‘苦勞人’であると思われる。友人やら知人、それに夫のアフリカの親族たちの日常的で瑣末な、しかしながら煩雑な暮らしの営みに実によく付き合っている。それだけではなく、小学校の校長職にあつて、その地域特有の困難、つまり移民やら政治難民やらの子弟らを抱えているというわけだから..。この世のいろいろな人のままならない現実に憐れみを懐き、それでも絶えず個々の人それぞれに魅せられ、寄り添うので

ある。〈今を存分に、有意義に生きなきゃ・・・〉といった逞しい精神 (resilience) が彼女の真骨頂なのだ。だからこそ、【朗らかであること】は抜群に秀でていた。大いに私の憧れとする。

さて、ここでペピのことを語ろう。〈熱情と懊悩〉を抱えた、妙に複雑な性格の子どもであるといった印象が残っている。人中にいても物怖じしない、好奇心旺盛で、それに心の機微にも敏感な、そうした子どもであった！どちらかというときさまざまな軋轢やら対立を何でも冗談にしてしまう母親譲りの面もありそうだが、沈着な父親(或いはその父系筋のDNA)の生来の生真面目さをも受け継いでいそう。あの格差社会において、黒人の父親と白人の母親の合いの子ということだけでも事はややこしいわけだが、ペピを日常的に取り巻く人たちが半端な数ではない。そして実に多種多様である。母親の勤務先の学校で、そしてチャイルドマインダーのMrs. Nのお宅で、彼はさまざまな人との交流の中で育っていった。そうした中で自分の‘立ち位置’というものを見失わないこと、それだけでも彼にとって大変なストレス(緊張感)でなかったはずはなからう。だが、彼はそれに実直に(!)耐えた。落ち着き払った風貌が備わってゆく。1歳4ヶ月頃には、家中のルーティン、日常生活の決まりごとに向まきフォローし、家族の中で自分の‘居場所’が出来てゆく。なかなか自信ありげな素振りが目立ってゆく。と同時に、相手次第で対応を変えることにも機敏で聡い。しっかりと相手を品定めすることをも知っている。母親とチャイルドマインダーのMrs. Nの差異を見抜くことから始まって、人間関係の勘どころをこの幼い子どもは心得ていた。その母親にも似て・・・母親にとって自分は‘唯一 only one’ではないということを承知しつつ、‘特別 special’であるということは疑いを入れない。実に揺らぎのない自信があった。‘唯我独尊’といった気風がなくもない。当然のこと、やんちゃできかっぽうになってゆく。だが、現実には甘くない。日々の暮らしの中で、高揚感と苦い落胆とが繰り返される。そしてやがてペピは、どこか愛嬌のあるものの、同時になかなか侮り難い、不敵な(!)2歳児に成長していった。まさに『恐るべき2歳児』への突入である。



彼が2歳4ヶ月頃に下に弟が生まれたのだが、その子が実にどう見ても‘弟 younger brother’という印象なのだ。控え目でおとなしい。ペピとは好対照である。勿論、ペピがその弟の‘先導役’として大いに張り切ったものと想像される。そうしたペピの‘ブレーキ役’というのはおそらく父親だろう。尊大ぶったり、偉そうだったり父親の趣向に反する。だからペピは殊更父親に叱責されることも訓戒されることもなからうが、事と次第ではクスッと笑われてしまう、もしくはただやんわりと却下されてしまうということもありそう。たぶんそれはガーナで生い育った頃の懐の深い叔父なる人の影響であったろうが・・・この人もまた、母親と同じで、人生とは『経験から学ぶ』しかない旨を信条としているようだった。ペピもまた、自ずと彼自身で『経験から学ぶ』しかないわけで・・・既成の規範を鵜呑みにする、もしくは唯々諾々と従う方が実は楽なのだ。No!と言われて、



ハイ、そうですかということだとしたら、聞き分けのよい、いい子でいられる。その点、『経験から学ぶ』などというのはむしろ厄介至極だ。いい子でばかりはいられない。むしろ‘要領悪い、不器用’と映ることもあり得よう。ペピの眼に映る両親とは、そのようなものであるかも知れない。だが、間違いなく味気ない人たちではない。味のある人たちなのだ。ペピが、そのように老いてゆく彼らを愛おしく思ってくれたらいいかと、私は心から祈っている。そして『経験から学ぶ』というプリンシプルからして、決して彼の未来に‘特等席’はおろか‘指定席’が約束されているといったことはなかろう。だが、いつかペピが成長するにつれて、どこに居ようとも、自分の‘定位置’やら‘居場所’を確保してゆくであろうことは大いに想像し得る。英国の未来を思うとき、ペピのような‘バリアー・フリー’の人間が社会を底上げしてゆくことを私は夢想する。

両親のどちらも相手の限界というものに対して実に鷹揚な人たちである。つまり相手の弱点・脆さ・傷つきやすさに対して許容的であるということだが、ゴリゴリとこちらの期待感やら欲望を相手に押し付けるといことがない。むしろ時と場合と相手によってはくしゃーないなあ・>と引っ込めてしまう。それがペピでもあった。彼は生来の熱情を思いの丈一杯に抱えることが苦しいということもあろうが、敢えてクール(冷淡さ)を装うこともあったように思われる。愛着心、またそれに矛盾する反撥心といったemotional turmoil(感情の渦)に足を掬われまいとしてか、<Go away(あっちへ行っちゃえ)!>が彼の中で時折爆発することもあったように覗かれる。それは、当時彼の愛着物であった‘バニーちゃん’(ぬいぐるみのウサギ)に対して往々にして観察されることではあったが・・。やがて彼が2歳を過ぎた頃に、観察期間を終えて訪問が定期的ではなくなった以降のペピの観察者としての私に対しての振る舞いにもまた、この<Go away(あっちへ行っちゃえ)!>が顕著となってゆく。別離が心傷むのだ。それは、私にしても否めない。

私がこうしたペピのいのちを受け継いでいるといえ、奇妙に聞えるだろうが・・。ここで私自身について語らねばならない。私が彼の地でのパーソナル・アナリシスにおいて分析家Miss. D. Weddellに語られたことで印象に残っている言葉が一つある。1975年から1979年までの週5回の分析セッションという長丁場で彼女が私の中で記憶される唯一とっていいものなのだが・・。それはすなわち、<the boy part of yourself(あなたの中の‘男の子’の部分)>ということ。それがどういう解釈の脈絡の中で語られたかはもはや覚えがない。だが当時、これが痛く新鮮に聞えた。それを耳にしたとき、自分の中に‘ナイ’と思っていたものが‘アツタ’といった、まるで探しものを見つけたみたいな、そんな感覚が私の中に湧き起こったことを微かに記憶している。それもまだ半信半疑ではあったが・・。

当時パーソナル・アナリシスはペピの観察と並行していたから、この想定外の<‘男の子’の私なるもの>は取りも直さずペピと重なってゆく。つまり彼は私にとって‘元気な男の子’の象徴となってゆく。ペピからそうしたイメージを摂り込み、私の中でそれは意識的かつ自覚的に育まれてゆかねばならないものと思うようになっていった。だがそれは、案の定というか、容易なことではなかった。

唐突に聞えるであろうが、私の母親は男の子を喪っている。名前を〈初男〉として、その供養をずうっとしてきた。その位牌が仏壇の中にある。つい最近のこと、どうにも気になってその位牌の裏側に記された‘命日’を確認したら、昭和23年2月24日とあった。私が1歳3ヶ月の頃である。妹はそのちょうど1年後に誕生している。この間のことは私の記憶の中では勿論、曖昧模糊としているのだが…。

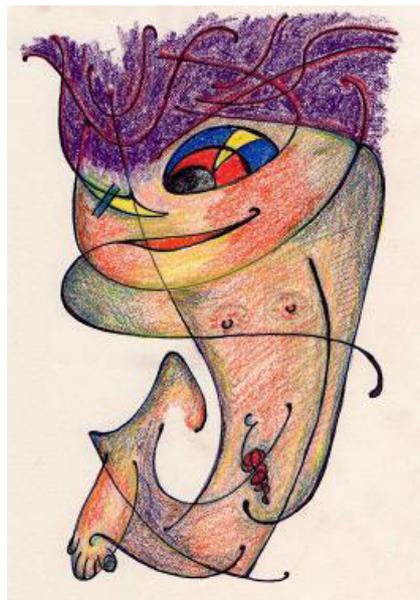
此の度、ペピの観察記録を読み返してみ、英文タイプで書き綴られたものとはかく、走り書きのようなメモ類は、その筋書きを追っても、そこに潜む感情の微妙なニュアンスを捉えることは難しい。そこでメモをただ拾い読みしていったわけだが、妙な引っ掛かりを覚えた記述が一つあった。詳しくは状況を推し測れないのだが、そのページの最後に唯、〈I felt sick on the way back home (帰途、気分が悪くなった)〉と書かれてあった。このメモ書きは、ペピが1歳9ヶ月の1975/09/25の観察日のものだ。意味不明だが、どうやらこの直前に書かれたと思しき、別のもう一つの記述がその理解の鍵となろう。〈New baby seems all right…Though I have no time to worry about it. (お腹の中の赤ちゃんは大丈夫みたいなのよ。でも心配してる暇も全然なくてなんだけどね…)〉と、母親が私に言ったと書かれてある。つまり流産の危機は脱したということを私に報告しているわけだ。ここで愕然とした。これが私に‘車酔い’を催させたということが、今更ながら衝撃であった。たかが Swiss Cottage から Baker Street までの乗り合いバスで15分ほどの道程なのであったから、車酔いというのも変だ。実はMrs. Pは、ペピが生後11ヶ月頃に妊娠をし、間もなく流産している。流産したということの報告を受けた記憶はあるものの、記録がない。私の‘思考停止’が覗かれる。おそらくはペピが11ヶ月ということさえも、それもむしろ良かったのかという思いが過ぎたに相違ない。ペピが第2児の出産という事態に耐えられるかどうか、当時の状況では心もとなく思ったのだろう。事実、母親も達観したふうにく健康な子どもが産まれてきて欲しいのだから、(流産なら流産で)いいのよ…と彼女は私に語っている。やがてペピが1歳半になった頃に、母親は再び妊娠をし、ペピが2歳4ヶ月頃に男児が無事誕生している。このとき妊娠について母親から聞いていないはずはなかろうが、記録はどこにも見当たらない。その前の‘糠喜び’に懲りたということもあろうし、また今度流産もあり得るということで、母親は慎重であったのだろうとは思いが…。確かにMr. & Mrs. Pにとってはこころでどうかペピを‘お兄ちゃん’にさせなくちゃという頃合ではあったのだろうが、そうした認識は間違いないわけで、しかしながら私の中でどうやら自分をペピに重ねて、やきもき(動揺)していたということは大いにあり得る。〈車酔い→吐く(戻す)→流産〉といった図式からして、私はペピに同一化して、母親の妊娠への忌避反応を実に身体化していたことになる。つまりアクティング・アウト(acting-out)である。

当時のペピの母親への‘占有慾’は熾烈を極めていた。母親を次の子どもに譲り渡すなど頑として許せることではない。だからペピの気持ちが荒れ狂うということは十分予想された。それを直視することが怖かったともいえる。内心何やら穏やかではない。ペピに自分を重ねながら、どこか茫漠とした思いに浸り、心深く沈潜する自分がいた。当時それと並行して観察に通っていた《ブレイグループ》でも、弟妹の誕生を阻まんとして躍起になり、怯えたり荒んで怒りまくったりする5歳児以下の幼い子どもらに自分を重ねていた。そうだからこそ、今振り返っても、傍の誰もが観察し得ない事実を私には観察で

きたということでもあったろう。この当時、それらが私にとって実に得難い経験となったのは間違いない。かつての私の幼少時の‘情緒的ぶり返し emotional turmoil’を彼の地での子どもらに重ねて反芻し、かつワークスルーする機会をもらったという意味で…。当然それは私の児童臨床にも反映されていったものと思われる。St. George’s Hospitalで直属の上司であったMr. John Bremnerから私が大いにサイコセラピストとしての資質を評価されたということの背景には、まさにこうした経験が不可欠であったと覗かれる。即ち、かくして私は【タヴィストック】の《乳幼児観察》という伝統の目論むところにその狙いどおりまんまと嵌ったということであつたらう。それも期せずしてだが…。

さて、ここに一つの忘れ難い衝撃の記憶がある。ペピが2歳4ヶ月頃、弟が産まれ、その祝いのパーティに私も招かれた。その華やいだ賑わいの中で、キッチンに集った親族に取り囲まれながら、キッチンテーブル越しに母親とペピは向かい合って座っていた。ふいにペピは、グイと身を乗り出して手を伸ばし、母親の頬を平手打ちした。それも往復ビンタというわけだ。冷やかな、凍りつくまなざしで無言のまま…。母親の方も、当惑したふうに微かに笑顔をつくったものの、黙ったまま…。衆人環視の中で、恰も母親へ対して＜裏切り者！＞と詰らんばかりの、あまりにも明白な抗議であった。母親をもはや独り占めにはできないと観念したかのようだが、だからこそペピの‘傷つき(心の傷み)’はホンモノだった。驚愕した。私もそうだったとは私の記憶のどこにも見当たらない。だがそれは実にリアリティがあった。確かにそのとおりだったと一瞬目の前にかつての自分を見たような、そんな夢うつつに眩暈を覚えた。私の中にもこのペピの‘傷つき’が疼いた。ペピを《熱情と煩悶の入り混じった魂》と評したが、実にそれは私でもあった。＜死んだ弟＝私の‘男の子’の部分＞が意識化される中で、それが正しく賦活されてゆくことこそがその後の私の課題となってゆく。かくして、ペピは私にとっての‘道連れ’となった。「同行二人」の行脚というわけである。そして尚も、今がある。

(2014/08/15 記)



ペピの童像



- ・タビストック 子どもの心と発達シリーズ 子どもを理解する <0～1歳>
ソフィー・ボズウェル著 サラ・ガスタヴァス・ジョーンズ著
平井正三監訳 武藤誠監訳 NPO法人子どもの心理療法支援会訳
岩崎学術出版社 2013
- ・タビストック 子どもの心と発達シリーズ 子どもを理解する <2～3歳>
リサ・ミラー 著 ルイズ・エマニュエル著
平井正三監訳 武藤誠監訳 NPO法人子どもの心理療法支援会訳
岩崎学術出版社 2013
- ・タビストック 子どもの発達と心理 0歳
D. ローゼンブルース著 繁多進・新倉涼子訳 あすなろ書房 1984
- ・タビストック 子どもの発達と心理 1歳
デイリス・ドウズ著 繁多進・新倉涼子訳 あすなろ書房 1982
- ・タビストック 子どもの発達と心理 2歳
D. ローゼンブルース著 繁多進・新倉涼子訳 あすなろ書房 1982
- ・魔術の年齢—幼児期の心の発達—
S. H. フレイバーク著 詫摩武俊・高辻玲子共著 金子書房 1978
- ・もし、赤ちゃんが日記を書いたら
ダニエル・スターン著 亀井よし子訳 草思社 1992
- ・子どもの自然誌
矢野喜夫・矢野のり子共著 ミノルヴァ書房 1986
- ・身ぶりからことばへ—あかちゃんにみる私たちの起源
麻生武著 新曜社 1992
- ・ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち1
やまだようこ著 新曜社 1987

【イラスト画; 「雛の声」、「家族の語らい」、「父性愛」 & 「ペピの童像」 1981】